

2215 離島覚書（島根県・島後島）



島後島の玄関口・西郷の市街地

令和4年9月13日

隠岐世界ジオパーク空港

松江駅から7時20分発のバスに乗り、出雲空港へ。

空港の「ブルースカイ」という店をのぞく。あごの野焼きのトビウオはベトナム産、しじみの佃煮のシジミは中国産、雲丹瓶詰のウニは韓国産。出雲名物の原材料は外国産が占め、日本の水産業の衰退を実感せざるを得ない。少なくとも20年前はこんな事態はなかったはずだ。

9時発の飛行機で島後島に向かう。約30分で隠岐世界ジオパーク空港に着いた。最近では知名度を上げるために空港名にやたらと愛称をつけることが流行っている。隠岐諸島が2013（平成25）年9月にユネスコの「世界ジオパーク」に認定されたことをアピールしたいのだろう。ちなみに出雲空港は出雲大社にちなんで「出雲縁結び空港」、米子空港は水木しげるの出身地にちなんで「米子鬼太郎空港」の愛称で呼ばれているが、少々過当競争気味だ。

隠岐空港の出口には、予約していたマリーナレンタカーが来ていない。しばらく待ったが来る様子がないので電話をかける。予約日を1日間間違えていたようで、慌てて飛んできてくれた。

隠岐諸島は島後と島前に大別され、島前は西ノ島、中ノ島、知夫里島の3島から構成される。島後島は面積が242.83 km²、周囲が209.9 kmで、4つの島の中では最も大きい。島はほぼ円形に近い火山島で、海拔500m級の山が連なる。そのため川が多く、水は豊富である。

北方4島を除き、本土と橋で結ばれていない有人離島のなかでは、島後島は佐渡島、奄美大島、対馬島、屋久島、種子島、福江島、徳之島に次いで8番目に大きな島である。これらの島には何れも空港が開設されており、島後島も例外ではない。航路を利用する場合は、島根半島の七類と境港から隠岐汽船のフェリーと高速船が通っている。フェリーの場

合は直行便で2時間25分、高速船で1時間20分ほどを要する。

隠岐世界ジオパーク空港は島の南端に位置する。旧空港は1965（昭和40）年に開港しているが、その後、南側の隣接地に新空港を建設、滑走路は2,000mに伸びた。新空港は2006（平成18）年7月から運用が開始されている。隠岐空港は、旧空港時代と新空港になってからのそれぞれ1回ずつ利用しており、今回は3回目になる。

レンタカーの手続きを空港の駐車場で済ませ、すぐに隠岐の島町役場に直行した。空港は島の行政の中心である西郷から10分ほどのところにある。



隠岐世界ジオパーク空港（左）、同空港の滑走路（右）

隠岐の島町役場

カーナビに導かれて着いたのは隠岐の島町の古い庁舎だった。建物はそのままなのに、人気がなかったので何処かに移転したに違いない。建物の裏に司法書士の事務所があったので、ここで道を尋ねて新庁舎に向かった。

新庁舎の前面には田んぼが大きく広がる。RC造3階建てで一部が4階建になっている（建築面積：2,368㎡）。この新庁舎は2020（令和2）年9月に竣工したのでちょうど2年が経ったことになる。したがって古いカーナビには登録されていなかったのだ。

新庁舎の建物は、床や階段に島産の杉や松などの木材がふんだんに使われている。建物の外壁は北前船をモチーフにした木質ルーバー（羽板）がはられ、森林資源の豊かな島であることをアピールしている。また、木質ペレットや太陽熱を利用した空調システムが導入されている。化石燃料を燃やさないようにとの配慮からで、時代の先端をいく。

役場の駐車場入口には「竹島は日本固有の領土です」と書かれた看板が掲げられていた。竹島は隠岐の島町に所属しているのである。後述するように竹島で漁業を営んでいたのは、島後島の北西端に位置する久見地区の人たちだった。

ここで隠岐の島町の歴史を整理しておこう。

江戸時代は幕府の天領で、松江藩の預かり地であった。1904（明治37）年の町村制の導入によって、西郷町、東郷村、中条村、磯村、中村、布施村、五箇村、都万村の1町7村が誕生する。その後、1954（昭和29）年に西郷町、東郷村、中条村、磯村の1町3村が合併して西郷町になり、1960（昭和35）年には中村が西郷町に吸収された。そして2004（平成16）年10月に都万村、五箇村、布施村と西郷町が合併して隠岐の島町が誕生、1島1町となって現在に至る。

2020年国勢調査時の人口は13,433人、世帯数は5,962戸であった。5年前に比べると、人口は1,175人、世帯数は288戸減っている。隠岐の島町の人口のピークは1950年の2.8万人ほどであったが、高度経済成長期に島外への流出が加速する。その後も漸減傾向が続き、1985年に2万人を、2015年には1.5万人を下回り、2020年はピーク時の約半分になっている。ただ、多くの島がピーク時人口を大幅に下回っているから、隠岐の島町の場合は相対的にみると人口は維持されている方になる。なお地域別にみると、島の中心である西郷地区に人口、世帯は集中している。

2階の総務課で町勢要覧を入手し、建設課で管内図を見せてもらい（町では製作しておらず県の方で作っているとのこと）、農林水産課で水産、農業、林業の各担当者から島の産業の現状を聞く。ただ水産業の担当者は詳しいことはすぐに分からず、聞きたいことを伝えて、後にデータをまとめておいてくれることになった。

隠岐の島町の一次産業は、島周辺に好漁場を有する水産業の生産額が圧倒的に多く、これに農業と林業が続く。農業は米と畜産がメインで、その他は自給程度だ。なお島後島の畜産業は山が多く草地を確保できないことから、牧畑制（輪作制農業）が行われていた島前の方が盛んだという。



隠岐の島町の旧庁舎（左）、新庁舎（右）

隠岐支庁

隠岐の県行政を司るのが隠岐支庁で、西郷漁港の岸壁の近くに5階建ての建物が建つ。支庁は県民局、隠岐保健所、農林水産局、県土整備局の4つの局で構成されている。

隠岐の島町で資料を収集してから県土整備局管理課に行き、隠岐諸島の管内図をいただく。引き続き県民局総務課で隠岐諸島に関する各種資料を入手した。

ちょうど昼休みにさしかかったので、西郷港近くの「グリーングラス」という軽食喫茶でスパゲティを食べ、午後一番で農林水産局水産部を訪ねる。以前はたしか水産局だったので、産業規模の縮小を反映して局から部に格下げになったようだ。

水産部では最初に竹谷万里さんからイワガキの話聞き、引き続き水産業全般について話を聞いた。彼は今年移動になったばかりの新人のため詳しいことはわからず、年長の斎藤寛之さん、さらに後から戻ってきた為石起司水産部長も加わって話を聞いた。

隠岐諸島のイワガキ養殖生産額は、2015（平成27）年の2.6億円をピークに減少し、2020（令和2）年には約1億円と大きく落ち込んだ。これはコロナ禍で飲食店の需要が落ちた

ことが原因で、その後 2011（令和 3）年には 1.5 億円に回復、今年に入ってさらに伸びているという。隠岐諸島では 4 町村でイワガキを養殖しており、西ノ島町と海士町がそれぞれ 12 経営体、知夫村が 7 経営体、島後島が 3 経営体という内訳である。島後島のイワガキ養殖は、南部の津戸と蛸木^{たぐぎ}、北部の中村の 3ヶ所で営まれている。

海士町（中ノ島）の海士イワガキ生産^株では社長が交代して、若い浜田さんが社長に就任、また島根県にいた勢村さんが現在顧問として働き、海士町独自にイワガキのシングルシードづくりに取り組んでいる（今年は 3 回目の種苗生産に成功）、などの情報を得る。

島後島の漁業者は島根県漁協西郷支所に組織されている。2021 年 12 月末時点の組合員数は、正が 172 人、准が 1,025 人の合計 1,197 人である。

島後で営まれている漁業は、中型まき網が 4 経営体、定置網漁業が 3 経営体、籠漁業が 8 経営体、底曳網漁業が 1 経営体でこの他に一本釣り、イカ釣り、刺網、採貝藻などの小規模な漁業が営まれ、経営体数は延べ 203 であった。

同年の漁獲量は 41,355 トン、生産額は 48.2 億円。数量ベースではまき網が圧倒的に多く、全体の 97% を占める。生産額は多い順に、まき網の 36.26 億円（75.2%）、ズワイガニ籠漁業の 5.89 億円（12.2%）、バイ籠漁業の 2.58 億円（5.28%）、一本釣りの 0.70 億円（1.46%）、その他が 2.81 億円（5.84%）であった。

県知事許可の中型まき網漁業は島後島の基幹漁業で、4 社 5ヶ続が営む。西郷地区が 2 社 3ヶ続、加茂地区が 2 社 2ヶ続である。漁場は基本的に島の周辺、したがって日帰り夜間操業で、朝、漁港に戻る。1 船団で 20 人ほどの乗組員が働く。近年、アジが減少してマイワシが増えているようで、ウルメイワシも入る。

ズワイガニ籠漁業は 7 経営体、バイ籠漁業は 4 経営体が営むが、両方を兼業する経営体が 3 経営体である。ズワイガニは水深 500m 前後の海域が漁場だ。昨年までベニズワイガニを対象とする経営体が 1 隻いたが、現在はやめている。バイ籠はエッチュウバイが漁獲対象で漁場は 180~500m の隠岐諸島周辺である。1 隻あたり平均 9 人の乗組員が働く。

イカ釣りは 5 トン未満の小さな漁船で、100 経営体以上が営む。漁獲対象はスルメイカとケンサキイカ（地元で白イカと呼ぶ）であるがケンサキイカは近年不漁で価格が高騰。大きいものでは 1 ぱい 700~1,000 円ほどになっている。なお隠岐では九州地方のように活イカの出荷はしていない。沖合底曳網を営む経営体が 1 あるが、こちらはイカ釣りとの兼業である。



隠岐支庁の建物（左）、岸壁に係留されているまき網の本船（網船）（右）

延縄はアマダイ、レンコダイが対象。曳縄はヨコワを獲り、養殖用種苗として供給している。採貝採草はアワビ、サザエ、ワカメが対象で、ワカメは板ワカメに加工している。なお、磯焼けはところどころで認められているが、それほど顕著ではないという。事実、隠岐諸島ではアラメを煮て食べる習慣があり、島内で干したアラメがたくさん売られていることからみても、九州沿岸からほとんど姿を消すなか隠岐諸島はあまり影響を受けていないことが伺える。

島後島には魚市場はなく、仲買人も存在しない。島の漁獲物は基本的に本土側の境港にある魚市場に出荷されている。しかし島には1万人以上が住み、年間12～13万人の観光客が来るので（コロナ禍の時は除く）、水産物の需要はそれなりに大きい。これらの需要に対応するため、市場出荷前に直売するか（「前取り」といい境港の相場を参考に後で値を決める）、境港にいったん出荷したものを再び島に戻す「行って来い」、の何れかの方法で島内に流通している。

玉若酢命神社

隠岐支庁水産部で1時間半ほど話を聞いた後、島後島の西半分ほどを視察することにした。西郷と旧布施村を結ぶ国道485号は島のほぼ中央部を縦断して北部の旧中村に至り、さらに東海岸を南下して旧布施村に至る。ちなみに国道は海上区間を経て西ノ島を抜け、島根半島の七類から松江市の中心市街地までの区間となっている。

支庁から1.5kmほど走った左手に玉若酢命神社が置かれている。871（貞観13）年に創建された隠岐の総社として知られる古い神社である。

駐車場に車を停めて参拝した。国道に面した大鳥居をくぐった正面に隋神門（1852年建築）がある。屋根は茅葺だ。この門は国の重要文化財に指定されている。門の先の右手にスギの大木がそびえる。八百杉といい、樹齢千数百年とされ幹囲11m、高さ30mで、こちらは国の天然記念物に指定されている。老木のため周囲を支柱によって支えられていた。同じころにスギの木が3本植えられたようだが、うち2本はすでに倒れており、最後の1本になっているらしい。

石段を登ると拝殿があり、その奥に隠岐造りの本殿が鎮座する。本殿は1793（寛政5）年に建てられたもので、こちらも国の重要文化財に指定されている。

神社の北西の丘陵地には前方後円墳1基、円墳14基が確認されており、玉若酢命神社古墳群として島根県の史跡に指定されている。歩いて見に行ったが、最初の11号墳は竹藪に覆われ、木柱が立っているだけだったので、その奥にある古墳も同じと判断し見に行くのをやめる。

国道沿いに玉若酢命神社の官司である億岐家の本宅がある。こちらは1801（寛政13）年に建てられたもので、やはり国の重要文化財に指定されている。建物を入った土間の奥の板戸に弾痕が、そして大黒柱には刀傷が残っていた。

上述した通り、近世、隠岐諸島は幕府の天領であった。幕府から統治を委託された松江藩は西郷に陳屋を置き、郡代に統括させ、島前と島後にそれぞれ代官を派遣して行政にあたった。

明治維新により王政復古を知った神官と庄屋の一部は正義党を名乗り、松江藩の隠岐郡

代を追放し、王政復古で隠岐は朝廷御料になったと宣言して 80 日間にわたり自治を行った。いわゆる隠岐騒動である。これに対し松江藩は隠岐の早期奪還を画策し、1868（明治元）年 5 月に 10 数人がこの屋敷を襲った。その時の鉄砲の弾痕であり、刀傷であるが、150 年以上の歳月を経てなお、そのまま残されているわけだ。



国指定の天然記念物の八百杉（左）、玉若酢命神社の拝殿と本殿（右）

米作と隠岐酒造

国道 485 号は八尾川沿いを走るが、その両側には一面田んぼが拡がり、ちょうど稲刈りの時期を迎えていた。この一帯に限らず、島後島の川沿いのほとんどの場所には田んぼがあり、耕作放棄地はきわめて少ない。

本土から遠く離れた島は食料を当然自給しなければならなかったから、食の基本である米の生産には古くから取り組んできたのである。その伝統が残る隠岐の島町は米づくりが盛んで、もともと米を島で自給することが可能であった。

役場の 2020（令和 2）年の資料によると、農家は 595 戸のうち販売農家が 175 戸、耕作面積は 424ha に及ぶ。このうち水稲の作付面積は 320ha で、収穫量は 1,500 トンであった。後述するように飼料米も作られているが、米を自給する家も多いようで、至る所に昔ながらの米を天日干しする「はさ掛け」が見かけられた。

国道の左手に隠岐酒造(株)の工場があった。島後島では日本酒がつくられている。昔から米は貴重だったから、米の収量が少ない島では、日本酒が造られることはない。わが国の離島で日本酒が作られているのは、この島後島と対馬（河内酒造）、佐渡島（北雪酒造、尾畑酒造、免見酒造、天領盃酒造、加藤酒造）の 3 島しか知らない。なお、麦、サツマイモ、サトウキビ、輸入米（泡盛）などを原料とする焼酎や泡盛の醸造所は各島にけっこう多く、波照間島や青ヶ島などのきわめて小さな島でもつくられている。

隠岐酒造(株)は 1972（昭和 47）年に地元の 5 社が企業合同により設立されたものである。会社の沿革はよくわからないが、多分、島内に昔からあった零細な酒蔵が合併して新たに立ち上げた醸造所と思われる。ブランド名は、「隠岐誉」と「高正宗」の 2 種類だ。日本酒以外にも、最近は海藻焼酎や八朔のリキュールなどを造っている。島内では酒米も栽培されているので、恐らく原料は完全自給されているものと推定される。

「隠岐誉」は島後島に限らず、島前 3 島でもよく飲まれており、隠岐の人々はこの日本酒を愛しているようで、飲食店で島外のメーカーのものはあまり見かけなかった。



県道 485 号沿いの米作地帯（左）、隠岐唯一の造り酒屋・隠岐酒造の工場（右）

水若酢神社と隠岐郷土館

国道の日ノ津トンネルと五箇トンネルを抜けると、旧五箇村に入る。

集落に入るとすぐに水若酢^{みずわかす}神社があった。927（延長 5）年以前に創建された古い神社である。927 年にまとめられた「延喜式神名帳」に記載されている隠岐の名神大社（古代における社格の一つ）は 4 社であるが、この神社はそのうちの 1 社である。

最初の鳥居を抜けると、境内の一面に「私塾膺懲館跡」と書かれた石碑が置かれていた。中村出身の儒学者・中沼了三のもとで学んだ中西毅男が隠岐に帰って開いた塾である。ここで学んだ若者たちは上述した隠岐騒動に傾注したといわれている。この私塾の建物はその後、郡学校として使われ、明治 30 年ごろまで存在していたという。

その先にもう一つ木製の鳥居があり、鳥居を抜けると左手に土俵が置かれていた。屋根は銅板葺きだった。境内にはクロマツの大木が林立する。隋神門をくぐり、拝殿に参拝。その奥の本殿は 1795（寛政 7）年に建造されたもので、「隠岐造り」と呼ばれる隠岐地方独特のつくりである。そしてこの本殿も国の重要文化財に指定されている。

神社の近くには 2 基の古墳があり、6 世紀中から 7 世紀にかけての土器の他に太刀や鍬などの鉄製品、勾玉などが出土している。

神社の裏手に隠岐郷土館がある。1885（明治 18）年に周吉郡ほか 3 郡の庁舎として建てられ、1926（大正 15）年から 1968（昭和 43）年まで島根県の隠岐庁舎として使われていた洋館である。この庁舎は当時、西郷に置かれていた。古い建物が解体・廃棄されることになったため、旧五箇村が譲り受けて 1970（昭和 45）年 5 月にこの地に復元したものである。あいにく火曜日が定休日、内部を見学することはできなかったが、農林水産業などの産業関連の用具や生活関連の品々が所蔵、展示されているらしい。

郷土館の脇に「からむし 2 号」という実験航海用の丸木舟が展示されていた。1982 年につくられたもので全長 8.2m、幅 0.64m である。縄文人が隠岐で産出する黒曜石を舟で本土側に運んだことを立証するために縄文時代の丸木舟をモデルに建造されたものだ。知夫里島から島根半島の七類港まで人力で漕ぎ続け、約 13 時間弱をかけて無事到着しており、縄文時代に隠岐から黒曜石を運搬していたことを立証したのだった。

この建物の近くに五箇創生館という伝統文化の伝承施設が置かれていたが、こちらも火曜日が休館日で見ることができなかった。



水若酢神社の本殿（左）、隠岐郷土館（右）

久見地区と竹島

再び国道 485 号を北上し、山光久見トンネルを出てすぐに左折し、久見川沿いの道路を海に向かって走る。集落に入る手前には伊勢命^{いせみこと}神社が置かれている。927 年以前に創建された神社で水若酢神社とともに延喜式神名帳に出てくる隠岐 4 名神大社の一つである。隠岐造りの本殿は久見の大火で焼失し、1841（天保 12）年に再建されたものだ。

久見集落の 2022 年 9 月 1 日時点の住基台帳上の人口は 100 人、世帯数は 59 戸であった。この集落は竹島でアシカやアワビなどを漁獲する漁師が活躍した漁業地区である。そんな関係で集落内に「久見竹島歴史館」が置かれており、説明要員として年配の女性 1 名が配置されていた。

周知の通り、竹島は韓国が不当に実効支配しており、1972（昭和 47）年を最後に日本人はだれも上陸していない。ここで歴史館の展示をもとに竹島における漁業の歴史を振り返っておこう。

船が大型化、遠くの漁場への遠征が可能になった明治時代になると、久見地区を中心に隠岐諸島に住む人々が竹島へ出漁し、組織的な漁猟が行われるようになる。こうしたなか鳥取県出身で隠岐在住の実業家・中井養三郎（1864～1934 年）は竹島のアシカ猟に興味を持ち、事業化が可能なることを立証すると、日本各地から竹島に漁師が集まるようになる。その結果、乱獲が進み資源の枯渇が危惧されるようになった。秩序ある操業が必要なことから中井は政府に竹島の日本領土の確認と漁業権を与えるように申し出る。明治政府は他国が自分の領土と主張せず、外国人による漁猟の実態がないことを確認した上で、1905（明治 38）年 1 月 28 日に竹島の領土編入と島根県隠岐島司の所管とすることを閣議決定した。

中井養三郎は竹島漁撈合資会社の代表を務め、同社に与えられた漁業権に基づきアシカ猟が行われた。漁業許可は長男の養一に引き継がれ、さらに久見地区の池田幸一、橋岡忠重、八幡長四郎の 3 家が竹島での許可漁業の権利を獲得する。その後、アシカの繁殖を図るために 3 家は 1925（大正 14）年から 1932（昭和 7）年までアシカ猟を中止し、1933（昭和 8）年から再開する。そして太平洋戦争前の 1941（昭和 16）年まで毎年、竹島に出漁している。主な漁撈対象はアシカとアワビで、アシカは生け捕りにして動物園や水族館、サーカスなどに売却、アワビは干しアワビに加工した。その他にサザエやワカメも獲れたが、金額的には微々たるものであったようだ。

戦後、韓国の初代大統領李承晩は一方向的に李承晩ラインを引き、多くの日本漁船を拿捕、

漁民を抑留したが、竹島も韓国の領土と主張し、その後も実効支配を続けている。

以上のような久見漁民の竹島での操業実績からみて、竹島が日本領土であることは明白な歴史的事実である。韓国の実効支配は全く不法と言わざるを得ない。



久見竹島歴史館の外観（左）、竹島におけるアシカ猟の写真（右）

歴史館の展示を見て、解説を聞いた後、ガイドの女性が近くに黒曜石の加工場があるので案内しようという。すでに私以外に入館者はいなかった。資料館の裏手にその加工場があった。「八幡黒曜石店」という。店のご主人が出てきて説明してくれた。ただし、加工場の中では若い男性が数人働いていたが、加工の技術的ノウハウがあるようで、見学は断られた。

久見地区の久見海岸に今でも黒曜石を産する。噴火口の縁に冷えてガラス質になったものが黒曜石で、石の割口が鋭利であることから、矢じりや石器の材料として使われてきた。久見の黒曜石は Na、Kなどのアルカリ金属が多いのが特徴とのことで、黒曜石の成分分析をすると産地が特定できるそうだ。

八幡黒曜石店ではこの黒曜石でブローチやピアス、ペンダントなどを制作しており、出雲大社で御土産として売っているらしい。

飼料米

久見の集落を後にし、海岸沿いの道路を南下、代の集落（36戸74人）を経て、北方の集落に出ると、土地は大きく開け、田んぼが広がる。北方は173戸367人が住み、旧五箇村の中では郡に次いで大きな集落だ。

この地区の田んぼでつくられている稲はほとんどが飼料米であった。

日本の水田は国民の米消費が年々減少しているため、耕作放棄が進み、水田の有する多面的機能が失われることが危惧され、農地を維持するために生産した米を畜産の飼料として活用する政策が2008年度から本格的に取り組みられるようになった。反あたり8万円の直接支払いが実施されている。こうした政府の支援策もあり、飼料米の作付面積は年々増加している。2021年度は後述するWCSが4.4万ha、飼料用米が11.6万haで、合わせて16万haで非食用米が作られている。

飼料米は、①粗飼料として茎や葉を利用する青刈りの稲、②完熟前の穂、茎、葉の全てを使う稲発酵飼料（WCS）、③濃厚飼料として実った籾を使う飼料用米、の3つに大別される。北方地区の飼料米は②で、米が熟する前の稲を機械で刈り取り、牧草を巻き取る時

に使うロールベアラでロール状に固め、ラップマシンを使ってフィルムをぐるぐる巻きにしてラッピングし、乳酸発酵させる。ちなみにWC SはWhole Crop Silageの略だ。

この一連の作業を行っているのは若い女性だった。近くにお父さんがいて、「父です」と紹介された。彼女は地元農家の娘で、農家の後を継いでいるようだ。ただし結婚しているというから、農業の好きな男性を婿にもらったのかもしれない。てきぱきと働く、美しい女性だった。

島後島の田の総面積は約 340ha で、このうちWC Sの栽培面積は約 50ha ほどだという。全体の 15%ほどだ。ところで島後島のWC Sの生産量は島内の需要を大きく上回るようになっているので、余剰分をやはり畜産業の盛んな島前地域に供給する計画が J Aで進められているという。

彼女の家の牛舎は田の縁にあった。現在 50 頭ほどを飼養し、繁殖した子牛を出荷している。隠岐の相場は 1 頭平均 40 万円ほどだという。コロナ禍で価格は下がっているようだが、鹿児島などの南の産地に比較すると価格は安い。



飼料米の収穫作業（左）、ロール状に巻いた稲のラッピング作業（右）

西海岸

田園地帯を後にして県道 44 号線を南下すると福浦湾に出た。県道 44 号は島後島の西海岸を通り、旧都万村を抜けて、西郷に至る。

新福浦トンネルを抜けてすぐの細い道を左折すると白糸の滝が現れた。落差は 80mほどあるらしい。その手前にはログハウスが並ぶが、これらは近くにあるホテル海音里^{うねり}の関連施設のようだ。県道 44 号に戻り、少し進んだところに同ホテルがあった。ホテルの前は重栖港になっていて、静かな湾内は福浦海水浴場になっている。島後島の一大観光地であるロウソク島に近く、ここに行く遊覧船の発着場も整備されている。

県道は随分よく整備されており、トンネルがたくさん作られている。夢崎トンネルを越えた先を海に下ったところに長尾田^{ながごうだ}の集落が形成されている。ここから油井の集落までは山中の道路となり、人家は全くない。大嶺トンネルを抜けて、坂道を下っていくと眼下に油井に集落が形成されていた。ここから旧都万村になる。油井の 8 月末時点の住民基本台帳上の人口は 44 人、世帯数は 31 戸であった。ところで人口の男女の割合をみると、男が圧倒的に多く、しかも外国人が 3 人いることから、恐らく定置網には外国人が雇われ、しかも I ターン者が単身で住んでいる可能性がある。

油井は油井川の河口に形成された集落で、川の南側には田があったようだが、現在は牧草地に変わっている。油井漁港（第1種）は大型定置網を営む吉田水産の根拠地となっており、漁港用地にはたくさんの網が干してあり、大きな漁具倉庫もある。その前には網揚げに用いる漁船が停泊していた。これ以外に漁船は見当たらない。

油井から那久に向かう坂道沿いに「水仙の里」という看板が立っていた。一帯は冬に水仙が咲き乱れるのだろう。県道脇の林の中に「油井の池」と呼ばれる小さな池がある。地すべりによってできたらしい。県道沿いの高台に西ノ島、中ノ島がよく見える展望所があった。那久の集落までは山ばかりが続く。



重栖港（左）、油井の集落と漁港（右）

舟小屋

那久と大津久の集落を経て、17時32分に都万^{つま}の集落に着いた。集落の先に都万漁港（第1種）が整備されている。

都万漁港に面する屋那の海岸には舟小屋群が並ぶ。舟小屋は京都の伊根が有名であるが、隠岐諸島の各所にもけっこう残っている。その中でも規模が大きいのがこの屋那の松原にある舟小屋群である。約20棟が並ぶ。じつはこの舟小屋は1987（昭和62）年に再建したそう。屋根は杉皮だったというから、恐らく観光資源を兼ねて整備したものだろう。

伊根の舟小屋は2階部分が住居になっているが、隠岐の場合は船を置く機能のみである。このように海岸近くに舟小屋が成立するのは、日本海の潮汐差が1年を通じて小さいからだ。



屋那海岸の舟小屋（左）、船小屋の内部（右）

都万漁港から末路川沿いに内陸部の山道を走り、歌木の化石産地を経て、国道 485 号に出た。国道を南下し、西郷の市街地のはずれにある「ホテルみやび」に 18 時すぎに着く。すぐに風呂に入り、食堂で夕食を食べる。この日の夕食は、ハマチとタイの刺身、しめ鯖、タコ塩辛、茶碗蒸し、豚肉野菜炒め、マダイ味醂干焼きだった。

令和 4 年 9 月 14 日

だんだん牧場

「ホテルみやび」を 7 時 40 分に出発し、西郷漁港に行く。西郷湾の北東側が港湾、西側が漁港となっている。漁港用地内にはまき網漁業を営む事代丸と天祐丸の事務所が置かれ、近くの岸壁に両まき網船団の漁船が係留されている。この他にバイ籠漁船が 4 隻、イカ釣り船が多数並んでいた。何れも大型の漁船である。

漁港に架かる西郷大橋を渡り、岬半島にある隠岐空港に向かう。空港の南側に西郷岬園地が整備され、先端には灯台がある。この一帯は牧草地になっていて、黒毛和牛が放牧されていた。この牧場を経営しているのがだんだん牧場だ。「だんだん」とは隠岐の方言で「ありがとう」という意味だという。

だんだん牧場の親会社は榊金田建設という地元の土建会社で、2010（平成 22）年に畜産部門となる同社を設立し、翌年 4 月から黒毛和牛の繁殖事業をスタートさせた。今年で 11 年目を迎えた。半島の先端部に牛舎 6 棟、堆肥舎 3 棟、飼料棟 1 棟、管理棟 1 棟が整備されている。同社の入口まで行ったが、「関係者以外立ち入り禁止」の看板があり、ちょっと中に入って牛舎の写真を撮って出てきた。

2019（令和元）年における雌牛の飼養頭数は 260 頭、子牛の飼養頭数は 160 頭、この年は 211 頭の子牛を島内にある隠岐西郷家畜市場に出荷している。

隠岐の島町役場によると、令和 3 年時点で牛を飼っている農家は、繁殖農家 22 戸、肥育農家 1 戸である。ちなみに肥育は隠岐精肉という会社が営んでおり、島内と本土側に「勇花理」という焼肉店を営み、肉の直売もしている。



空港近くに放牧されている牛（左）、だんだん牧場の牛舎（右）

島後島における同年の飼養頭数は、繁殖雌牛は 525 頭、肥育頭数が 17 頭、肥育経産牛が 6 頭、突牛（闘牛用の牛）56 頭という内訳だった。そして子牛の出荷数は 370 頭であった。したがってだんだん牧場は隠岐の島町の子牛出荷数の半分以上を占めているわけで、島の子牛生産の大きな担い手になっている。子牛のセリ市は 7 月、11 月、3 月の年 3 回開催され、J A が運営している。ちなみに島後を含めて 4 島にそれぞれ市場があるそうだ。子牛

のセリ売価はコロナの影響で下がっており、7月は40万円台であったというから、畜産関係者の価格認識は共通している。

隠岐の黒毛和牛の繁殖は放牧が中心である。ただ冬季は牧草が不足するため干し草のストックが必要になる。だんだん牧場の場合は、島内の耕作放棄地を積極的に借りて牧草を育て、島内における自給と物質循環をめざしているようだ。

なお、畜産農家を対象に島内に公共牧場が23ヶ所にある。このうちだんだん牧場は旧空港用地の45.4ha、空港ふれあい公園の4.6haを活用している。

開拓農家

だんだん牧場から空港へ戻る途中の農家で、収穫したサツマイモの処理をしている女性がいた。74歳というから私と同じベビーブーム世代である。サツマイモの品種はベニアズマ、ベニハルカの2種で、干し芋に加工して販売するらしい。現在はサツマイモの他にソバと長ネギをつくっている。

空港周辺は戦後に開拓された。戦後の食糧難に対応するため国が主導した「戦後開拓地」だった。旦那さんの先代、つまり彼女からみれば義父は鳥取県の倉吉市から1947(昭和22)年に入植している。当時の入植者は45戸ほどであったという。牛を使役して土地を開墾した。ここの土地は粘土質で耕耘が大変だったようだ。

当初は麦やサツマイモをつくり自給していたが、貨幣経済化が進むと、1963(昭和38)年から葉タバコの栽培を始めた。多い時には島の260戸の農家が葉タバコを栽培していたという。農家数が多かったため、当初の葉タバコ栽培面積は3~5畝であったが、年々、葉タバコ農家が減少していったため、彼女のところは最終的には3町2反まで栽培面積を拡大した。葉タバコは収益が高く、魅力的な栽培種で反収は56~60万円ほどになり、多い時には年間の粗収入は2,000万円ほどになった。葉タバコの乾燥機が5部屋あり、さらに共同乾燥機もあったそうだ。

1999(平成11)年に新空港の建設が始まり、農地を空港用地として売却したことから今津地区の農家を中心に農業から撤退する。また粘土質のため葉タバコに連作障害が発生したことなどから葉タバコの栽培は終焉を迎えた。彼女の家は最後まで残ったが、2006(平成18)年で葉タバコ栽培はやめている。その後は、サツマイモや長ネギなどをつくり、島外に出荷しているが、島は輸送コストがかかり、さらに販路の確保が難しいという。



収穫したサツマイモの処理をする農家の女性(左)、蕎麦と長ネギの畑(右)

南部の集落（旧西郷町）

空港に最も近い集落が今津である。立派な家が多い。集落を下った先に今津漁港（第2種）が整備されている。こちらの漁港は、1997（平成9年）から2007（平成19）年にかけて整備された比較的新しい漁港で、建設に伴って海の近くにあった民家53戸が移転している。今津の集落の家が立派なのは、上述した空港建設、あるいは漁港建設に伴う移転などの補償金に関係しているのかもしれない。しかしせっかく整備された漁港にはイカ釣漁船が1隻置かれているだけだった。漁港の竣工記念碑によると、漁港の総工事費は57億円であった。

今津の隣の集落が岸浜である。道路脇が斜路になっていて船外機が陸揚げされていた。今津の字は今津と岸浜を含むが、こちらには146戸289人住む。

岸浜の次は箕浦の集落だが、海沿いの道がないため、一旦、西郷湾の湾奥に位置する西田の集落まで戻って県道44号に入る。鳥越峠から左折し、山道を下った先が箕浦である。小さな入江の奥に集落が形成され、箕浦漁港（第1種）が整備されている。中央に突堤があり、漁船が4隻ほど係留されていた。斜路には船外機が10隻ほど陸置きされていた。

箕浦の隣が加茂の集落であるが、こちらも海岸沿いの道路はないため大きく迂回しなければならない。加茂は旧西郷町の西のはずれに位置し、旧都万村と境を接する。1.5kmほどの深くて狭い入り江になっており、まさに天然の良港であった。湾の両側に家が軒を並べる。また湾奥に流入する加茂川の両側は田んぼになっていて米を自給できる環境にあったようだ。箕浦と加茂は合わせて加茂の字に入る。両方合わせて198戸392人が住んでいる。

後述する旧都万村の蛸木と津戸を含めて島後島南部の集落はリヤス式海岸が続き、典型的な純漁村である。



岸浜の集落と漁港（左）、箕浦の集落（右）

祐生水産

加茂漁港の東側の中ほどに祐生水産ゆうせい（有）の社屋とまき網船団の漁船が係留されていた。事務所に伺い、2階の社長室での野津社長から話を聞いた。

祐生水産のまき網は中型で、県知事許可漁業である。本船の網船と灯船3隻、運搬船1隻、曳き船2隻の合計7隻で船団を組んでいる。乗組員は33人。島の出身者が大半を占めるが、インドネシア人4人とIターン者が含まれる。インドネシア人の研修生は10月に帰国する予定になっている。乗組員とは別に事務員と工務員が5人おり、社員は総員38人で

ある。乗組員は地元の水産高校からも採用しており、Iターンの場合は全国からやっている。東京、奈良、大阪からも来ているようだ。

まき網の漁場は基本的に隠岐諸島周辺である。したがって夕方出港して夜間操業、朝方に帰港する日帰り夜間操業になる。運搬船だけは、漁獲物を境港に出荷してから島に戻る。ただしまき網は島根県内全域での操業が可能なおかげで、魚群の形成状況によっては浜田方面に出漁することもある。この場合は漁場に近い産地市場に出荷する。

島根県下のまき網は西日本のように月夜間に休むことはない。したがって以前は出漁日数が年間230～250日と多かった。しかし、最近は漁獲技術が向上しているため、1つの魚群を数日かけて獲っていたものが現在は1日で全て獲れるようになったことから、最近の操業日数は160～180日に減っている。もちろん土曜日と盆、正月は休漁である。

野津社長は加茂の生まれである。加茂の集落では昭和30年代から長崎県から技師を呼んで和船による巾着網を始めた。1965（昭和40）年前後に機船巾着に変わり、グループに分かれて営んでいた。夏期は巾着網（まき網）、冬期は刺網という兼業形態であったが、1968（昭和43）年からグループを統合して有限会社として法人化し、まき網専業に変わった。

島後島には、西郷地区に事代丸と天祐丸の2社があり、事代丸は2ヶ統の船団を有するので2社3ヶ統、そして加茂地区には祐生水産の他に丸大漁業(有)の2社2ヶ統、全部で4社5ヶ統の中型まき網が操業している。多い時には島後島だけでも11ヶ統のまき網船団があったので、往時に較べると半減したことになる。

なお島根県には大中型を含めて60ヶ統のまき網があったが、現在は隠岐諸島の8ヶ統（西ノ島の3ヶ統を含む）と浜田、磯谷のそれぞれ1ヶ統だけになり、大中型まき網は共和水産の3ヶ統と青葉の1ヶ統だけになってしまった。

マイワシの漁獲量のピークは1989年であるが、2006（平成8）年の段階でも祐生水産では年間6,000～7,000トンのマイワシを獲っていた。単価は7～8円/kgと安かったが、全量をミール工場が引き取ってくれたので、単価は安くとも量でカバーできたという。その後、マイワシは減り続け、恵曇地区に15ヶ統あったまき網は、中国電力の島根原子力発電所の立地地域でもあったことから全船が廃業したという。



加茂湾に面した(有)祐生水産の本社（左）、同社のまき網船団の灯船（右）

このように、まき網の淘汰が進んだのはマイワシを中心に資源が激減したことが大きな要因であるが、近年の倒産は装備の近代化投資を怠ったことが大きいと野津社長は指摘する。探査船の能力がアップし、さらに一つの群れを3～4日かけて獲っていた時代から、

機械設備の能力向上によって一晩で獲れるようになったが、古い装備の漁船は漁獲に日数を要し、したがって高コストになって淘汰が進んだというのが野津社長の見解であった。

近年、まき網の漁獲物はアジ類が減って再びマイワシが増えてきているという。以前であれば、加茂湾内に小アジが多数入ってきて釣りをする人が多かったが、近ごろはめっきり減っているようだ。

なお、祐生水産では3年前からワカメ養殖を始めている。収穫期には1日に2トンほど、少ない日でも1トンは出荷している。大田の魚問屋が隠岐のワカメを買い付けてボイル塩蔵しているらしい。

加茂の集落は背後に田があるものの、相対的にみるとその面積は少なく、専ら漁業を中心に生計を立ててきたという。漁業以外では公務員が多いようだ。

南部の集落（旧都万村）

加茂の隣が蛸木（たくぎ）だが、ここからは旧都万町に属する。県道44号まで戻り、唐尾トンネルを抜けてから脇道に入り、蛸木半島を下った先が蛸木である。この半島の北側に集落を一望できる愛宕山があり、山頂まで車で登った。ここから島前の3島が見え、素晴らしい眺望である。山全体が牛の放牧地になっている。

坂を下った先が蛸木の集落で77戸178人が住む。沖に無人島の松島が横たわる。蛸木漁港（第1種）にはイカ釣漁船が多く係留されていた。また、蛸木湾内にはイワガキの延縄式の養殖施設が並んでいた。

県道に戻る途中で道に迷い、行き止まりとなり、その先は放牧場になった。苦労してバックで元の道に引き返した。

蛸木の隣が津戸の集落で、142戸294人が住む。

津戸漁港（第2種）の湾口ではイワガキ養殖が行われている。湾奥には町のアワビ種苗センターがあったが、どうやら使っていないようだ。

漁港を視察しているところへ、役場の農林水産課、水産担当の青田さんから電話がかかってきた。リクエストしておいた町の水産業に関するデータが準備できたとのことだった。すぐに取りに行くことに連絡し、役場に向かった。ついでに住民課に行き、8月末時点の住民基本台帳上の字別世帯数と人口のデータをもらう。文中に記した集落の世帯数と人口は全てこのデータに基づいている。



蛸木の集落（左）、イワガキ養殖の延縄施設（右）

東部の集落（旧浦郷町）

町役場を出て、市街地にある「茶々」という喫茶店でカツ丼の昼食を食べてから、12時41分に島の東部の集落へと出発した。

西郷と布施を結ぶ県道47号線を西郷湾に沿って北上する。西郷湾は東部の港湾区域、西部の漁港区域に分かれているので港湾区域沿いを走った。最初の小田地区は木材団地になっており、港湾用地内には杉の丸太が野積みにされていた。どうやら島で産出する木材の積出港になっているようだ。

西郷湾々奥には県立隠岐水産高校が置かれている。島後島には普通科の県立隠岐高校があるので、2校体制だ。ちなみに島前の中ノ島には県立島前高校が置かれている。

水産高校の手前に宮田城の史跡と書かれた看板が立っていた。宮田城は鎌倉時代に隠岐を管轄した守護佐々木氏によってその原型がつくられ、後に守護代となった佐々木氏によって整備された典型的な水軍城であったという。

対岸の飯田地区には、中国電力西郷発電所、中電プラント、太平洋セメントのサービスステーション、徳畑採石所などの工業立地が集積している。

湾奥を過ぎると人家はなくなり、杉林が目立つようになる。島の西側とは対照的に東側の山には杉の植林地が目立つ。



県立隠岐水産高校（左）、セメントサービスセンターなどの工業関連立地（右）

佐々木家住宅

犬来の集落を過ぎて釜の集落（15戸24人）に入り、佐々木家住宅を訪ねた。

佐々木家は江戸時代の釜村の庄屋を務めた家で、住宅は隠岐の民家様式に基づき、1836（天保7）年に建てられたものである。隠岐の島町内の古民家としては最古のものとされ、国の重要文化財に指定されている。

屋根は杉皮葺きでその上に石が規則正しく並べられている。外装は下半分が板張り、上半分が土壁だ。入口を入ると土間があり、その奥は7つの部屋に分かれている。用材は杉、椎、栗、松、樺、桂、桜などが用途に合わせて使われ、天井板を除いて屋敷内の造作材には漆が塗られている。

土間には当時の籠が残り、蒸籠、手箕、樽などの道具類が保存されている。カミノマには碁盤と将棋盤、甲冑が置かれ、床の間には2本の太刀と掛け軸が掛かる。土間から客間までがL字型の鍵のような間取り（鍵屋敷）になっており、隠岐独特のものだそう。ナ

カエには囲炉裏が掘られている。

シモノマの鴨居には故佐々木千吉氏の遺影と東京帝国大学法学部の卒業証書が掲げられていた。1945（昭和 20）年 5 月に満州国新京で応召され、同年 8 月 17 日に間島省琿春で戦死したと書かれていた。終戦間際に招集され、将来を嘱望された優秀な人材が失われたことは佐々木家にとって痛恨の極みであったことだろう。

また、1959（昭和 34）年 8 月に佐々木家を訪れた歴史学者の肥後和男が揮毫した「朝暉清輝」（朝日が清く輝く）の書が掲げられていた。

見学者は私 1 人であったが、庭には先生と 5～6 人の学生らしきグループが何やら話をしていました。建築か、歴史を学ぶ大学生かもしれない。



杉皮で葺かれた佐々木家住宅の屋根（左）、佐々木家住宅の内部（右）

西部の集落（旧布施村）

佐々木家住宅を後にして県道 47 号線を北上する。次の集落が大久^{おおく}で、川沿いに集落が形成され、前面に大久漁港（第 1 種）が整備されている。この集落の世帯数は 102 戸、人口は 183 人で、東部海岸の集落の中では比較的大きい。

大久を過ぎると険しい海岸線沿いの山道となり、旧布施村に入った。最初の集落が卯敷である。世帯数 35 戸、人口 57 人の小さな集落だ。集落の前面に卯敷港、背後の川沿いにわずかな田が残る。

再び県道 47 号を北上する。現在は、卯敷トンネル、黎明トンネル、春日乃浦トンネルが整備され通行は楽だが、トンネルができる前は大変な山道だったに違いない。

最後のトンネルを抜けると布施の集落となり、布施漁港（第 1 種）の入口に旧布施村役場がある。建物は走路を挟んだ両側に建ち、2 階が渡り廊下で結ばれている。現在は隠岐の島町の布施支所となっていて、7～8 名の職員がいた。布施は世帯数 130 戸、211 人で、当然のことながら、旧布施村管内では最も人口が多い。

この布施からは島後島の最高峰・大満寺山（607.7m）に上るルートが春日川沿いに整備されている。役場で道を尋ねたところ途中工事中の箇所があり反対側に越えることはできないという。このルートは林道南谷線というが、この北側の中谷線を登るとトカゲ岩という奇怪な岩を見ることができるといわれたが、あいにく山にはガスがかかっていたので果たして見ることができるとい保証はなかった。結局、山には入らず、布施からの国道 485 号線をそのまま北上することにした。

飯美トンネルを抜けてから県道を脇にそれ、飯美の集落に行った。この集落は30戸、47人で、人口は極端に少ない。漁船は5隻ほど係留されているだけだった。この集落には古い舟小屋が残っており、その数は全部で15棟ほどになる。しかしだいぶ古く、今にも朽ち果てそうな状態だ。

飯美港から再び国道に戻る。青海トンネル、青稜トンネル、元屋の集落を抜けると、旧中村の中心地である中村に出た。182戸、375人が住む。中村漁港（第4種）は避難港になっているためか広く、その手前にクロマツの大木が群生している。中村集落の背後は谷に沿って田が広がる。田の耕作放棄は少ない。中村川河口に漁船が多数係留されていた。

再び国道を進み、西村を過ぎて伊後の集落まで行った。この先は前日走っているのここでUターンし、中村まで戻り、島の内陸部を走ることにする。



旧布施村の庁舎（現布施支所）（左）、中村のクロマツ群（右）

林業

伊後地区の道路沿いで杉を伐採している若者が4～5人いた。監督官と思われる人が付き添っていたので、林業を学ぶために島にやって来たIターンかもしれない。伐採し、枝打ちされた杉が、4mの長さに玉切りにされていた。近くには材木を移動させるための重機も置かれていた。

島後島の森林面積は21,052ha（民有林：20,886ha、国有林：166ha）で、島の面積の86.6%を占める。数多い島の中でも、島後島は屋久島や対馬などと並んで林業が盛んな島の一つといえよう。

少々古いですが、隠岐の島町における2013（平成25）年度の一次産業の分野別生産額をみると、水産業が32.9億円とダントツであるが、農業が1.5億円、林業が1.4億円であり、林業は農業と並ぶ産業となっている。

役場の資料によると、2020（令和2）年の林業経営体は87戸であった。また隠岐の島町には隠岐島後森林組合が組織されていて、組合員は1,479人に及ぶ。年間の伐採量は約2万m³で、ほとんどが杉である。この3/4が原木の状態専用船を使い、島外に出荷している。島内での製材は1/4ほどである。もともと産出される木材は天然の松が中心だったが、近年は人工林の杉に主力が移っている。島外への搬出は上述した西郷港小田の木材ヤードが使われている。

島をほぼ一周して感じるの、島の西側は松を中心とした自然林が多いのに対し、東側

は杉を中心とする人工林が多いという点だった。東海岸沿いの道路脇にはよく手入れの行き届いた杉林が見られ、また多くの伐採跡が見られた。



島後島東部の杉林（左）、伊後のスギの伐採現場（右）

カブラ杉と銚子ダム

中村から島の中央部を縦断するもう1本の県道316号線を走る。中村川に沿って道路が整備されている。集落に近い河口部の両側に田んぼが広がり、すでに一部の田は稲刈りが終わり、はさ掛けにされていた。

山中に進むほど、中村川は溪流の様相を呈してくる。さすがに大きな島だけあって、溪流の風景は本土側と変わらない。最初のトンネルの名称は「鮎返しトンネル」と書いてあった。隠岐にアユが生息しているのだろうか。

途中の道沿いに沢水をパイプで導入した水飲み場もあった。

分水嶺となる新武良トンネルの手前に「カブラ杉」と呼ばれる杉の巨木が生えている。1本の株の根元が7本に分かれた独特の杉だ。樹齢は約600年になるそうで、幹囲約9.3m、樹高約38mと案内板に書かれていた。

分水嶺の下流は銚子川になり、やがて八尾川と名を変えて西郷湾に注ぐ。銚子川の上流には銚子ダムがつくられ、ダムの上流は伊賀湖と呼ばれる。



7本に分岐したカブラ杉（左）、銚子ダムの上流の伊賀湖（右）

銚子ダムは重力式のコンクリートダムで堤高は39.7m、総貯水量は2,530千 m^3 で、1990（平成2）年度から工事に着手し、10年後の2000（平成12）年3月に完成している。このダムは、第1に八尾川がたびたび氾濫したことから洪水調整の機能、第2に八尾川の農業

用水等の補給を行うとともに河川流量を維持すること、第3に島内の水道水の確保、という3つの役割を担っている。

隠岐国分寺とモーモードーム

県道316号線はやがて国道485号線と合流する。

池田の浄水場の角を右折し、隠岐国分寺に向かった。聖武天皇は741(天平13)年に奈良東大寺をはじめ全国68の国分寺と国分尼寺の建立を命ずるが、隠岐国分寺はその時に建てられた由緒ある寺だった。

参観受付所で入館料の400円を支払い、参道を進む。突き当たりが国分寺跡である。隠岐の島町教育委員会は平成21年度から25年度までの5年間、発掘調査を行っており、食堂や鐘楼、中心建物の周囲を囲む塀の一部跡、江戸時代の鑄造所跡などが見つかっている。

その後、国分寺は1507(永正4)年に復興されたが、明治維新後の廃仏毀釈で破壊された。現在の本堂はその後に建てられたものである。

本堂跡の脇に後醍醐天皇の行在所跡があり、石碑が建っていた。元弘の乱で配流になった天皇は隠岐に1年ほど滞在し、島を脱出して王政復興を果たすが、その時の仮の皇居があったとされる場所である。行在所の場所はこの隠岐国分寺と西ノ島の黒木御所の2ヶ所が知られているが、どちらが正しいのか結論が出ていない。どちらの島も自分のところだと主張しており、研究者の見解も分かれている。

国分寺の脇にモーモードームという闘牛場が整備されている。島後島にはこれ以外にも露天の闘牛場が数多くある。牛と牛が戦う闘牛は、沖縄や徳之島、宇和島市などに伝えられているが、室内ドームの闘牛場があるのは徳之島とここだけだろう。

隠岐の闘牛は島流しになった後醍醐天皇を慰めるために始まったと伝えられ、800年の歴史を有する。ただ、この言説は疑わしい。天皇が実際に滞在したかも疑わしいし、たった1年間しかいなかったわけだから、その後も今日まで続いたのは別の理由があったはずだ。



隠岐国分寺内に建つ後醍醐天皇の行在所跡の石碑(左)、モーモードームの内部(右)

隠岐自然館

国分寺から西郷港に直行し、この日泊まる隠岐ビューポートホテルの駐車場に車を停める。隠岐汽船の船客ターミナルの隣に隠岐ジオゲートウェイという建物があり、1階に観光協会と隠岐ジオパーク推進機構が入り、2階が隠岐自然館となっている。入館料500円

を支払って入場した。

隠岐自然観は世界ジオパークをPRする施設として、2021（令和3）年5月にオープンした。ジオパークはジオ（地球）とパーク（公園）を合わせた造語で、地球科学的な価値を有する地域を「大地の遺産」として保護し、観光や教育に活用することで地域の魅力を知り、活性化に役立てることを目的にしているようだ。

ジオパークは日本ジオパークとして認定されている地域は46に及び、このうちユネスコの世界ジオパークに認定されているのが、隠岐を含めて9地域である。

今年の4月から（一社）隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協会と観光協会が合併し、（一社）隠岐ジオパーク推進機構となった。同機構はカラー版の「オキドキ」という冊子を不定期に刊行している。従業員は20人で、このうちポーランド人とアメリカ人の2人の外国人女性がいる。入口で入館料を販売していたのはこのうちの1人で流暢な日本語を話した。従業員20人分の給与総額は相当な額になると思われるのでこの費用をどこから捻出するのか、他人事ながら心配になった。

自然館は、大地、生態、文化の3つをテーマにしたパネルによる解説が主なものだった。パネルの主題となるキーワードは、神話、遠流、北前船と文化、牧畑、舟小屋、黒曜石、風待港などである。



隠岐自然館の入口（左）、自然館の内部（右）

ユネスコの世界遺産にしる、ジオパークにしる、日本人は権威づけされるのが好きだ。指定されることによって観光客が増え、お金が地域に落ちることを期待してのことだろうが、大勢の観光客が訪れるようになれば、そもそも指定の根拠が毀損されるわけであり、矛盾に直面しかねない。こんなはずじゃなかったと反省することにもなるだろう。

籠漁業

隠岐自然館をひと通り見てから、島根県漁協の西郷支所に向かった。まき網に次ぐ生産額を誇る籠漁業について聞きもらったことがあったからだ。

支所の前の係船岸にはバイ籠漁業の漁船（19トン型）4隻が横付けされていた。ちょうど漁協の職員と思われる人が外に出てきたので、バイ籠漁業について話を聞いた。

上述したように島後島のバイ籠漁業は4経営体で、このうち3経営体は11月下旬から2月末までのズワイガニ籠漁業を兼業しているので、この間、バイ籠は休業となる。バイ籠漁業に禁漁期はなく、周年操業だが、操業頻度は週1～2回、月にして5～6回という。

籠数は200個ほどに制限している。

このように漁獲努力量を抑えているのは、2004（平成16）年をピークにエッチュウバイの漁獲量が減少、しかも小型サイズの割合が増えてきたことから、資源状況が悪化してきたと判断したことによる。島後島では4隻の経営体と漁業者で「西郷ばいかご会」を組織しているが、会では漁獲箱数を削減し、さらに航海数の制限を定め、籠の目合を拡大するなどの資源管理措置を講じてきた。

こうした資源管理の取組みによって2015（平成27）年から資源の回復が明らかになり、さらに供給量が減少したことから単価もアップしたようだ。



西郷漁港の漁船係船岸（左）、バイ籠漁業の漁船（右）

町立図書館

隠岐文化会館裏手にある町立図書館を訪ねる。図書館は月曜日休みで、平日は10時～18時まで開館している。17時に入館したので1時間しか余裕がない。郷土関係のコーナーで関係する図書を閲覧し、町史等をコピーしてもらう。図書館の女性は親切で、コピーも丁寧であった。

この日の夕食は隠岐牛を食べてみることにした。島で唯一黒毛和牛を肥育し、食べさせる隠岐精肉が運営する「焼肉・勇花里」という店に行く。店は隠岐病院の近くにあり、宿から歩くのは大変なのでレンタカーで出かけた。したがって酒は飲めない。この店は自ら肥育した牛を「黒磯牛」のブランドで売り、食べさせる。黒磯牛のカルビ焼きをたのんだ。次いで石焼ビビンバを食べ、宿に戻る。



島後産の乳肉を食べさせる焼肉・勇花里（左）、西郷港前の隠岐ビューポートホテル（右）

隠岐ポートビューホテルは西郷港前の隠岐ポートプラザの3～5階を占めている。レンタカーは翌朝まで借りてあったので、港の近くのレンタカー会社の駐車場に停める。この一帯は飲食店が集中しているのだが、明らかに人通りは少なく閑散としている。

令和4年9月15日

西郷港と直売施設

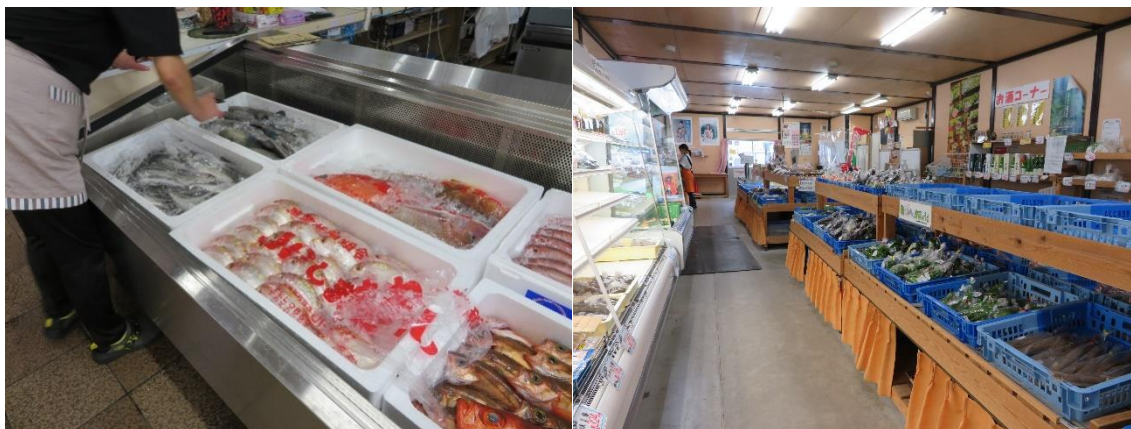
西郷港の周辺には宿泊施設の他に各種飲食店が立ち並ぶ。ホテルで朝食をたのまなかったため、近くのサカータブロスという喫舎店でモーニングを注文した。その後、早朝の西郷港周辺を歩いた。人通りは少なく閑散としている。

本土と隠岐諸島間に航路が開設されたのは1885（明治18）年のことであった。以来、埋め立てによって港は拡張されてきた。集落のなかで最も港に近い通りは「灘通り」と呼ばれ、かつて海岸線であったことを示めている。

灘通りの脇に「隠岐国西郷水火災記念碑」と書かれた石碑が建っていた。西郷港周辺は何度も大火に見舞われ、特に1888（明治21）年の大火では527戸が焼失して明け方に鎮火したものの今度は暴風雨による水害で運び出していた荷物が流失するというダブル災害に見舞われている。このような大水害が2度と起こらないようにとの願いが込められている。

隠岐汽船の建物の西側にはフィッシャーマンズワープ隠岐合同会社が経営する「フィッシャーマンズワープ隠岐」が置かれている。この施設は当初漁協が経営していたはずで歴史はけっこう長いはずだが、現在は合同会社が肩代わりしているようだ。1階が鮮魚や「隠岐肴」などの酒類、板ワカメやアラメなどの海藻類、土産物などが売られている。8時には鮮魚が搬入され、イカ類、メバル類、チダイ、カワハギ、アジなどの魚介類が並んでいた。2階はレストランになっているが、こちらは10時にオープンする。

また道路を挟んだ反対側に隠岐ふるさと直売所（あんき市場）が入るプレハブの建物がある。こちらも8時にオープンする。島内の生産者が組織する協同組合が12年前から運営している。主として農産物を中心に、菓子類、土産物類、種類などを販売している。海藻類の加工品はフィッシャーマンズワープ隠岐と重なる。



フィッシャーマンズワープ隠岐の鮮魚売り場（左）、あんき市場の野菜や食品売り場（右）

隠岐汽船の乗り場は2階である。8時30分発の「フェリーしらはま」に乗船、次の訪問地である中ノ島の菱浦港に向かう。2等船室は座敷なので横になるしかない。したがって食堂室に移り、テーブル席で次の訪問先の資料を読み、デッキから島の風景を眺めた。